



妙たえ の光ひかり

通刊84号 復刊64号

2008年12月1日(季刊)

角田山妙光寺 発行

〒953-0011

新潟市西蒲区角田浜1056

TEL 0256-77-2025

銀杏

本堂前の山側にイチヨウの大木があつて、境内を見下ろすようにすくつと立っている。一般に寺や神社の境内には古木が多く、この木も樹齢二百年以上はある。青葉の季節もいいが、やはり美しいのは黄金色の黄葉の季節で、落ち葉も風情がある。

ご存じのとおりその実が銀杏で、食べるのは美味しいがそこまで仕上げるのが木枯らしの季節でもあり大変な作業だ。鐘楼に鐘を復興した三十年余り前から除夜の鐘を撞いた方へ、順番を書いた紙袋にこの銀杏を入れて記念品にしている。

豊作と不作がほぼ隔年で去年が豊作だった。寒百日間の荒行で知られる千葉の遠寿院住職におすそわけしたら、妙光寺の銀杏だからと、修行僧が黒護符といって祈禱効果のある伝統の飲み薬にしてくれた。

銀杏が落ちたるあとの風の音

中村汀女

先輩の遺骨

小川英爾

年の瀬を迎え今年の印象深い話のひとつ。春先のある日、学生時代にお世話になった先輩Kさんの奥さんから突然の電話があった。岐阜に住んでいることを年賀状で知っている程度の、三十年以上ご無沙汰の関係である。それでも印刷の年賀状にいつも「元気か？」とぶっきらぼうに書き添えられた言葉が、飾らない男っぽいあの頃の性格をしのばせるに十分だった。

私は大学三年の二月に先代住職である父が亡くなり、悩んだ末に妙光寺を継ぐ決心をした。卒業して寺に入るためには住職になる資格を得る必要がある。沙弥（しゃみ）とっていわば半人前の僧侶としての資格は小学生のときに取らされていたから、あとは大学での単位修得と本山で三十五日間の修行が要る。それまでは仏教系の大学で社会学を専攻して教員資格も視野に入れていたので、そちらも卒業したいしこうなると仏教学部の授業も増える。さらに夏

休みは身延山での修行とその前に教員免許のための教育実習二週間があつて、あの一年間は就職活動こそなかったものの普通の四年生の三倍は忙しかった。仏教の授業は夜間部まで取らないと間に合わず、曜日によっては朝から夜の九時まで大学にいた。遅くなつてから一人の夕食や、日中の空き時間に話し相手になつてくれたのが、社会学の研究室で助手を務めていたKさんだった。

Kさんは大の酒好きで、とはいうものの二人ともお金がないから遅くなつた日に駅裏のごく安い立ち飲み屋でポケットの百円玉を数え、最後は一杯の酒を分け合つて飲むなぞとしていた。ある日Kさんが「今日は金があるぞ！」と言うので安心していたら奥さんに渡された定期券代で、それが酒代になつたなんて失敗は数知れない。そんなあるとき例によつて飲んだ後で「小川君、頼みがある。この前の失敗を女房が許してくれないのにまた今日も飲んでしまつ

た。悪いがこれから我が家に行って一緒に謝ってもらえないか」と言う。責任の一端を感じた私は遠い埼玉までついて行き、結局はお世話になって泊ってきた。それでも父親を亡くしたばかりで先々への不安を抱えた私にとって、早稲田の大学院を出てきた社会学の先輩の話と、ちょっと頼りないがそのおらかな人柄に精神的に支えられたことはいまでも忘れられない。私の卒業後そんなKさんが岐阜の大学に職を得たという話は耳にしていた。しかしその後会う機会はなく、私は年賀状にいつも「一杯ご一緒したいですね」と書き添えた。実際いつかその時を楽しみにしていた。

そこへ三十数年ぶりに聞く奥さんからの電話だった。「夫が先日体調を崩し、嫌がるのを説得して病院に行かせたところ肝臓が悪く末期の状態と言われました。長年のお酒がいけなかったんです。既に意識が混濁していつまで持ってくれるか……。私たちは関東の出でこちらに親戚もなく、もしもの時にどうしたらいいのかご相談したくてお電話しました」。憔悴しきった奥さんの声だった。驚いた私は「私に葬式をということですか？でも岐阜は新潟から交通の便が悪く約束できないので、そのときはお近くのお寺を頼んであげます。成人されたでしょう息子さんたちともよく話し合ってください。先のことは心配しないで悔い

のない看病をなさることが大事ですよ」と答えるのが精一杯だった。

その後一度電話があつて、ひと月余り後「先日亡くなりました。本人はお酒を飲むと葬式はいらぬ、骨は近くのあの川に流せと言っていました。息子たちと相談の結果家族だけで葬式をしないで火葬しました。でも私は気持が納まらないのです。私の祖父が熱心な『法華経』の信者で、私も少なからずその血を引いている気がします。昔住んでいた埼玉のアパートには日蓮宗のお札も貼ってあり、小川さんにお泊まりいただいたときお願いしてお経を読んでいただきましたが覚えていらつしやらないですね。できればお骨を持つて妙光寺さんに伺うのでお経を読んでいただけますか？」弱々しい声だった。「いいですよ。ただ夏はゆっくりお話も聞けないので秋にしましょう」と私は答えた。

九月のある土曜日、奥さんと三人の息子に三男のお嫁さんの五人がKさんの遺骨を抱え、約束の時間にかなり遅れて到着した。奥さんが途中の駅で体調を悪くしたという。その夜は妙光寺に泊まりじっくり話を伺った。息子たちは、父親の遺志を尊重したいけど、お母さんがどうしたいかが一番という考えにまとまった。奥さんは「どうしていいか

わからない。でも夫のために戒名をお願いしたい。」と言
う。私は「恩ある先輩のこととはいえ、本人が望まなかつ
たことはどうでしょう。奥さんがそれでも戒名を希望され
るなら、奥さんあなた自身の戒名も一緒につけませんか。
Kさんへの供養はご自身の問題として受け止めて欲しいか
らです。散骨なさるかどこにお墓を建てるか、それとも
実家のお墓に入れてもらうかと言う話ですが、結論を急ぐ
必要はないからしばらくじっくり考えてください。」と言
って家族の席を辞した。

翌朝、さわやかな顔をした息子さんたちと憔悴した奥さ
んが本堂に上がり、Kさんの法要を営んだ。朝食後奥さん
から「戒名の件は考えます。夫の遺骨ですが、安穩廟をお
分けいただいて収めることはお願いできませんか。朝に境
内を散歩して雰囲気がとても気に入りました。夫もご縁の
深い小川さんのお寺なら納得するでしょう。私もいずれ岐
阜を引き払い息子たちの住む東京に移ります。東京なら新
潟も近いですし。」思いがけない申し出に私が戸惑ったが
「結構です。とりあえず一区画確保しておきますので、ご
遺骨は預かりますから再度よく考えて申し込みいた
だきそれから納骨しましょう」と応えた。

十一月、当時を知る私の指導教授N先生の八十歳をお祝

いするささやかな会が東京で開かれ出席した。席上、近況
を語れといのでこの話をかいつまんで報告したところ、
先生に「それはよかった。K君も喜んでいるよ。彼も無鉄
砲な男だったから奥さんも大変だったろうなあ」と仰って
いただいた。新潟に戻った翌日、奥さんから「気になつて
いたのですが体調が悪く延び延びになつて申し訳ありませ
ん。安穩廟の申込書を送らせていただきます。そうでした
かN先生には夫が一番お世話になつた忘れられない方で
す」と電話があつた。偶然とはいえ絶妙なタイミングに、
改めてあの日々を思い起こして感慨にふけてしまった。
そんな今年も一年が終わろうとしている。敬愛する岩間日
勇・前身延山法主様のお言葉が改めて実感された。
『逝きし人は 再び帰らず／過ぎし日々も また戻らな
い／流転の中に 生きる命／はかなければこそ 充実した
ものにし／短ければこそ 確かなものにしよう／悔いなき
一生を願いつつ 逝く年の瀬に立つて／生きる尊さを し
みじみ思う』

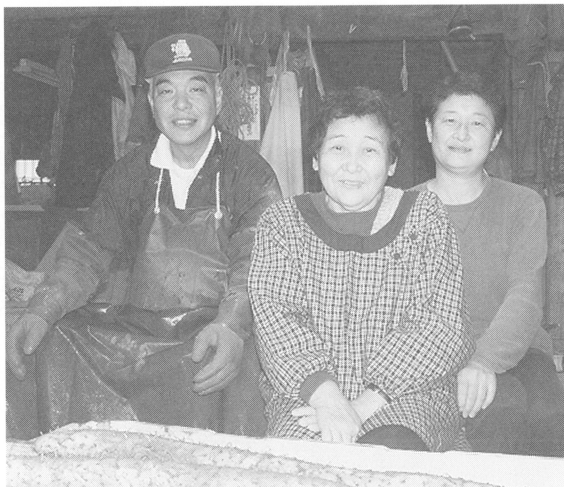
（前身延山法主・岩間日勇撰下著『共に生きともに栄える』より



一家でお寺の為に

石田 直也 さん(五十二才)

初枝 さん(五十三才)



長芋を洗う作業の手を休めて

寺の先代住職と同年代だったせいとか、寺にだけは一目置いていた。その長男で先代の金一さんは弟妹が七人もいたせいとか、親譲りの頑固さの中にも親分肌で話のわかる人だった。大の酒好きで年を取ってからも村一番の酒豪で通じた。

その金一さんは半農半漁の暮らしで交際も広く、寺の行事には野菜や魚を調達しては届けてくれた。晩年にガンを患い、住職が講演で二週間渡米して帰国した翌日に亡くなったが、「ご前様の帰りを待っていたんだね」と親戚中から言われた。そこに婿入りした直也さんは、二人の

子供も成人し、近年農業経営も厳しく農家が減少するなかで、初枝さんと二人で農業に専念している。世話好きな一家の雰囲気を受け継ぎ、さらに直哉さんは農協の役員、地区の役員も引き受けている。数年前から寺の世話人もお願いし、檀徒

総代の大滝さんを補佐する地元のまとめ役でもある。

毎年夏のフェスティバル安穩で直也さんは設営を担当。今年は初枝さんと婆ちゃんがゲストの俳優・藤田弓子さんに地元の手料理をと、各種野菜のほかに長男の稔君が従兄と一緒に海で採った岩牡蠣とネコ貝、冬から保存していた海藻のギバサ汁を用意した。藤田さんが残りを持ち帰るほど大喜びされた。

今回、本堂のお釈迦様像を修復のために滋賀県の仏師の工房にお運びするのに、経費削減から石田さんのワゴン車を借りた。さらに総代の大滝さんと一緒に運転手もかってでていただいた。畑の長芋を収穫する多忙な時期なのに、往復で二日間を費やした。それを「お寺のためだから」という、そんな家族挙げての協力はいつもながらに心強い限りである。

角田浜の檀徒では行事の手伝いのはか、冬に次世代の夫婦が寺に集まってお経の練習を数日行っている。その成果もあって、石田さんではお盆や命日等には婆ちゃんを中心に家族が揃ってお経を読み、太鼓をたたいてお参りする。

地元でも檀徒の間でも屋号の喜三平(きそへい)の方が通りのいい石田さん。代々世話好きな家庭で、人の出入りの多い明るい家族だ。直哉さんはそこのお婿さんである。先々代は明治生まれで頑固を絵にかいたような爺ちゃんだったが、

京住院の造園工事完成ほか



・前寺の造園工事完成

秋に入って工事を続けてきた前寺の造園工事が、一部来春に植える草花類を残



園路からの京住院



京住院から前庭ごしに見る山

して完成しました。建物からは手前につつじや椿が、そして以前からある大きな櫻の枝の下から山が見えてとても気持ちのいい眺めです。駐車場からは土を固めて舗装した園路もあって、足の不自由な方や車いすでも安心です。さらにお通夜のことも考え夜間用に園路灯もあります。

河野清治さんに加えて内藤至さん、保科孝且さんのご協力のほか、笹川イキさんからは丹精込めて育てられたお庭のサツキとつつじの大株を二十五株もいただきました。緑に覆われる来年の春が待たれ、さらに年を経て落ち着きを増すことでいい庭園として出来上がっていくことでしょう。

二十年以上にわたり安穩廟と境内の造園設計を担って来られた野沢先生が二年前に亡くなられ、今回は弟子の松本さんが設計し、埼玉から毎週通って工事管理をされました。

・その利用状況

七月に開堂以来、県外や遠くアメリカから法事に来て宿泊された家族や、近くの方が法事のお齋に幾度となく利用されています。アメリカの方はことのほか喜ばれました。ただお齋の場合テーブル席で十六人が限度なため、ご希望にそえない場合もありました。そんななかで最初の葬儀に利用された小西さんから感想を寄せていただきました。

―母の葬儀をしていただきました。

新潟市・小西國昭と家族―

「まずはじめに妙光寺様の御前様と京住院の建設資金を寄付された河野様に心から感謝申し上げます。また、奥様ならびに鎌田上人、そのほかのお寺の方々、式を進行してくださった葬儀社の方々に感謝申し上げます。

母（享年八十五歳）は、私と妻と娘が見守るなか、新潟市内の病院で、十月二十六日深夜十一時二十一分に静かに息を引き取りました。

悲しみとこの後どうすればよいのか動揺が交錯する中、病院から携帯電話で妙光寺様に電話をかけました。一年前に、この日が来たら妙光寺様の前寺で葬儀を行っていただくことをお願いしていたからです。深夜にも関わらず御前様が対応され、妙光寺様手配の葬儀社の方が病院に迎えに来られ、その後すぐに母の遺体とともに家族全員で京住院に迎え入れていただきました。

森の中の静かな空間とまだ新しい木

の匂いのするお部屋、そして暖かい床暖房やお風呂と清潔なキッチンなどが、悲しみで疲れている私たちの心と身体を癒してくれました。二泊三日の間、一軒家をお借りしている様な感覚で他人に気兼ねすることもなく、家族で安心して静かに過ごせたことが何よりでした。

お風呂もキッチンもハイテクで清潔でとても使い易かったです。葬儀でバタバタしている間でも、ちゃんとお風呂に入る事が出来て、心身ともに癒されました。和室にはお布団やシーツ、枕カバー、お風呂用のバスタオルやハンドタオル、キッチンにはコップ、お皿、お箸などの小物が揃い、冷蔵庫にはビールやお酒、ジュースなども準備されていて、御前様や奥様の細やかなお心使いが感じられました。

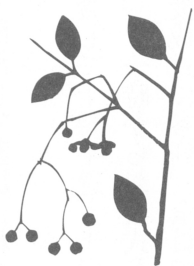
お通夜から告別式まで、火葬場に行く以外京住院から移動することなく済みましたので、お年寄りの多い私たちの親族にはとても助かりました。通夜振る舞いを京住院で、葬儀後のお齋は

本坊の和室で行いました。お料理も美味しく、みんな悲しみから解き放たれ、笑顔も見られました。

こじんまりした葬儀でしたが、参列して下さった私の会社の方々や親戚の人たちも皆さん口をそろえて「温かくていいお葬式だったなあ。故人も幸せだったなあ」と言って下さり、私たち家族自身もとてもアットホームな葬儀ができて、本当に良かったと思っています。これで故人も安心して旅立てたのではないかな、と安堵しています。

これから京住院でのお葬式をお考えの方に少しでもご参考になればと思います、感想を書かせていただきました。

合掌



・「茶房」の計画

整備が進んだせいもあるのでしょうか、境内を散策する人が増えています。また檀信徒や会員の方が本堂にお参りする姿をよく見かけます。そんな方の中から「行き帰りに時間がかかるから、お参りした後ちよつと気兼ねなく休めるところがあると、特に暑い夏など助かる」との声がありました。以前から山門前に静かな茶店があるといいねとは、冗談半分で話題になることがあります。

門前の茶店は難しいですが、せつかく庭も整備した京住院なので、空いている日はここをお茶も飲める形で解放できないか検討しています。人手と経費の問題があり、ざりとて会計処理の都合で有料にするのも簡単ではありません。京都の寺にはかないませんが、庭と山を眺めながら寛げる静かな場所は付近にもないし、何とか形にできればと思うのです。



・「杜の安穩」受付停止

平成元年に開設以来すっかり全国に定着した妙光寺の「安穩廟」「杜の安穩」ですが、今年六月で満杯になりました。その時点で問い合わせが百件近くありましたので、急遽四十区画を増設して予約受付をしました。しかしそれも五ヶ月でほぼ一杯になり、十一月下旬に外部からの受付を停止しました。ごく稀に「契約したが事情で不要になった」というキャンセルがあるので、檀信徒、会員の紹介に限りその時点で空きがあればお受けします。お問い合わせください。新規の計画は今のところ白紙です。

・お会式、授戒会

十一月三日に日蓮聖人のご命日法要（お会式）と、第七回授戒会を行いました。生前に戒名をおつけする授戒会ですが、今年は十六名の方が受けられました。埼玉の高橋さん（男性）は四十代で、お父さんが安穩廟に埋葬されており、せつかくのご縁だから妙光寺の基本を身につけたいと希望されました。また古くからの檀

徒の阿部夫妻は八十代で、横須賀からお二人揃って近くで前泊して参加されました。

午前九時に集合して十時半過ぎまで住職の講義を受け、十一時からお会式と一緒に祖師堂での授戒式に参列。全員で五十名によるお会式を営むことができました。大広間で当番手作りの昼食を食べ、午後から一時間半、野口法蔵師の記念講演を聞きました。

野口師は新聞社のカメラマンとして渡



野口法蔵師の講演

ったインドで考えるとところがあり、カメラを捨ててチベット仏教の寺で三年間の過酷な修行をされた、その貴重な体験を話されました。現在は臨済宗の僧籍を持ちながら寺を持たず、大半は医者への集まりに招かれて人間の持つ自然治癒力と精神の関わり的重要性を各地で講演しているそうです。飽食の現代人は断食や瞑想でかなりの病気が治る、またお経を繰り返して唱えることは健康上も効果が大きい等の体験談に皆さん納得の思いで聞きました。

授戒された山田さんからののがき

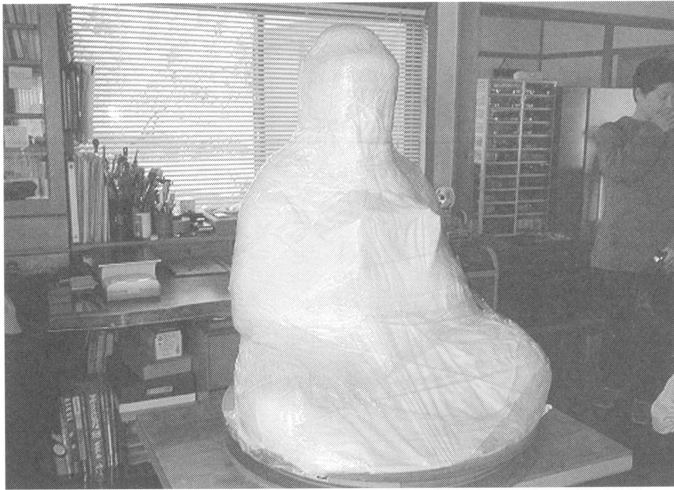
「授戒会に参加させて頂き誠に有難うございました。厳粛な中にも心温まる儀式に感動しました。また身に余る立派な戒名を私どもにお与え頂き有難うございました。おいしく頂いた昼食会や、ご講演を振りかえり充実した一日になりました。皆様によろしく」

・ご本尊の修復

かねてからのお知らせですが、本堂のご本尊が修復のため一時お留守になりました。お迎えして八年になる定期検査のようなもので、紫外線による木肌の焼具合の修復と、この機会により荘厳さを増す目的で金泥という金の混じった顔料を衣のひだに書き入れる作業を行います。時間を要する作業のため一度にはできな

いという仏師と金泥師の都合で、今回はお釈迦様だけとし、台座と四菩薩像は来年にします。

今回のお釈迦様像は十一月十三日に滋賀県甲賀市の石川仏師の工房にお運びし、来年春のお彼岸までには仕上がる予定です。この間はお曼荼羅（まんだら・掛け軸の形式）のご本尊を安置します。金泥書きの経費は巻の内藤至さんと他数名の方のご寄附によります。

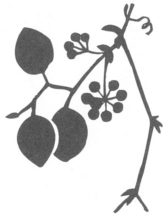


白布に包まれて仏師の工房に到着したお釈迦様像



・菊花の展示

すっかり恒例になった秋を彩る菊の鉢花を、巻の内藤清さんと松山の河村一良さんが今年も玄関に飾り、参拝の方々の目を楽しませていきます。細かな枝ぶりに丹精込めた思いが伝わってくるようです。菊花を育てるにはとても手間がかかるため、菊花展で有名な弥彦神社でも年々出品者が減っていると聞きました。



・基金の現況

妙光寺の通常の運営は一、皆さんからの会費、二、皆さんからのお布施、三、基金による利息、この収入で成り立っています。特に基金は安穩廟の収益と寄付が原資で、大和証券、メリルリンチ証券、第四銀行、アリコ生命の四社に預け、ことに前三社による外国債券がその大半です。宗教法人の優遇税制で利息も非課税のため、これまで実質年六%前後の収入実績があります。

当初その預け先は大和証券が主体でした。ある時期に山一証券の破綻など日本が金融危機となり、安全のため当時新潟に支店を開設したアメリカ系のメリルリンチ証券に分散しました。

ところが先般メリルリンチ証券の債権の一部に、報道されているサブプライムローンが含まれていて、その元本が回収不能になったと通知されました。その可能性が高いという時点で役員会に報告し、これまでに総額でそれ以上の収益を得ていることもあり、不可抗力と受け止めざるを得ないとなっています。さらに

今回アメリカで破綻した大手証券会社がありました。メリルリンチ証券はかろうじてアメリカ第二位の銀行に吸収合併されて事なきを得ています。今後とも予断が許せない状況ですが、世界経済の大混乱のなかでは静観するしかありません。

・研修生・矢部の解任

次期後継住職の候補者育成として公募した矢部君ですが、九月十日を持って解任しました。当初三か月の研修期間終了時に、後継住職の候補には採用できない旨を伝えましたが、本人と両親から僧侶としての育成を強く希望されました。これを受け入れて妙光寺での手伝いを条件に一切の経費を妙光寺で負担し、この夏身延山での三十五日間の修行を以て日蓮宗の僧侶資格を得ました。

しかしこの修行から戻った三日目に、本人の「妙光寺を辞める」の一言で出て行ってしまいました。後日改めて檀徒総代への挨拶の機会を設定し、正式に解任しました。住職の不徳の致すところとしてご了承いただきたく願います。

・受付・寺務の今後



夏の忙しい期間に受付・寺務を応援してくれた小田上人が約東の九月で退任され、今後は住職の三女を入れ

ることにしました。ただ現在大学四年生で来年三月の卒業後になります。妙光寺の職員として扱います。それまでの期間、臨時として安穩会員でフェスティバル安穩のスタッフもお願いしている柿崎恭子（写真）さんが不定期で入ってくれています。受付と電話の対応を担当していますので宜しく願います。

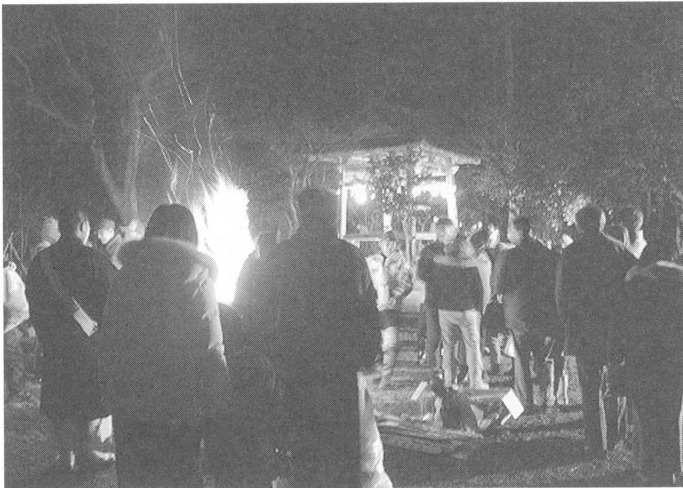
・秋奉加

農家の檀徒の皆さんから秋の新米を奉納していただく秋奉加ですが、今年も多くの方々にお供えいただきました。祖師堂にお供えして新年を迎え、来年の行事でお参りの方々のお齋米にさせていただきます。

・年末年始のお参り

大晦日は除夜の鐘に毎年たくさんの方が集まります。近隣からも、また最近はや暖冬のせいかわ雪もありませんから遠方からも子供連れで見えます。境内がライトアップとお焚きあげの火で明るく照らし出され、鐘の音と賑わう声が響きます。

十時半から本堂で除夜法要、十一時四



昨年の除夜の鐘

十分ころから鐘撞きが始まります。これまでは寒い中を順番待ちの行列で並んもりましたが、昨年からの受付で番号札を配って番が来るまで火の近くでコンニャクや甘酒で待つ方式にしました。また、くじ引きで縁起物の熊手等も当たります。古いお札や注連縄をお焚きあげしていただきますのでお持ちください。

新年は元旦と二日の九時から午後四時まで受付して住職がお待ちしています。お出かけください。

・住職の講演予定

住職の講演が新潟市内で三回予定されています。十二月七日（日）午後二時から新潟市立中央図書館。新潟市中央区役所主催で、住職が講演と後半に若手漫才の「きぬがさ」と語ります。予約制で新潟市役所コールセンター（025-243-4894）が申込先です。来年三月九日東区役所、三月十六日江南区社会福祉協議会それぞれ主催でひらかれます。

檀徒とは



八ページでお知らせのように、夏に急きよ五基四十区画増設した「杜の安穩」までが一杯となり受付を停止しました。お断りしてがっかりされる顔を見るのが本当に申し訳ないのですが、敷地がありません。今後のことは白紙ですが、現在の態勢では無制限に増やすのは如何かとの役員会での意見です。稀に事情でキャンセルされる方があります。その際に檀徒・会員の紹介者を優先してお受けしますのでお問い合わせ下さい。

夏に行われたフェスティバル安穩のスタッフ反省会を十月末に開き、来年の相談もしました。埋葬者へ合同供養と会員、檀徒の生前交流を目的に、平成二年に始めて来年で二十年目を迎えます。日程を八月二十九日(土)とし、ゲスト講師の候補を挙げ、節目の記念でもあり交流パー

ティーの再開や、好評の安穩法会の内容について相談が盛り上がりました。安穩会員と地元檀徒にスタッフをお願いしていますが、会議後はお持たせの手打ち蕎麦などで夜遅くまで賑やかでした。来年の話で恐縮ですが、ぜひ心待ちにしたいと思っています。

宗派を問わない安穩廟では葬儀の形式も宗派も限定はありませんが、同時に檀徒でなければ葬儀は原則としてお受けしないとしています。法事や納骨、それにもなうお斎会場は安穩会員でもお受けしてはいますが、突然起こる葬儀と葬儀の京住院使用、関連して生前契約と生前戒名は檀徒に限定しているということですから。檀徒であれば葬儀には県内各地はもとより、全国どこでも伺っています。

葬儀は突然のことなので檀徒以外にま

では手が回らないのと、ご本人に妙光寺の宗派を選択していただきたいのがその理由です。またこれまで檀徒の会費と寄付で妙光寺が支えられてきた歴史もあります。

決して差別しているのではなく、檀徒になるには申し出ていただければいつでもお受けします。その場合年会費が一万円と、時には決して強制ではない寄付のお願いもあることをご理解ください。これは従来からの檀徒と同じです。

一方で、次の代がないとか、いても子供に檀徒を強制したくないという質問が数多くあります。妙光寺で言う檀徒は檀家と違い、家による世襲ではなくあくまで個人との約束です。次の世代の本人が檀徒を継続するか安穩会員かを選択するものです。その際に会員を希望すれば年会費も現行なら二、五〇〇円に戻ります。

このように説明することで納得いただき、檀徒を希望される方が増えていることを妙光寺としては歓迎しています。

寺庭から

「淡々と暮らす」小川 なぎさ

晩秋の境内は様々な色のパッチワークのようで、まさに錦秋そのものです。落ち葉を踏みしめたときのカサカサと乾いた音や、少しずつ色の違う葉の絨毯の上を歩くのは不思議と気持ちが悪く着きまです。それからまだまだ小さい寒桜ですが、たくさん花をつけています。皆様のご協力や時間という力で境内は年々すばらしい景観になっていくようです。京住院の庭も完成し、また少し違う空間が出来上がっています。来年は是非四季折々に境内の散策にお出かけ下さい。京都のお寺にあるような文化的な庭ではないのに、この気持ちのよさはなんなのだろうとよく考えることがあります。造園の手法が入りつつあたたかも自然のままのような心地よさは、二十年以上かけて少しずつ作り上げてきたからなのかも知れませぬ。宝物ですね。

さて、最近の私は色々なことをやろう

とする気持ちが湧いてきました。秋の實りをたくさんいただいた時には、本を片手に漬物や、ジャム、料理などを楽しんで作っています。夜は本を読んだり、繕いものをしたりと地味ではありますが、落ち着いた静かな暮らしは穏やかな気持ちを取り戻せるのでとても良い時間です。あとは何かスポーツでもはじめて、なまめた身体を燃やすことが最終目標でしょうか。

毎月の診察のついでに十年振りに血液検査を受け、高脂血症といわれて毎日の食事を野菜中心の質素な献立にするようになりました。住み込みの弟子もいなくなり、住職と二人の食卓はご馳走がなくてもなんだか楽しいもので、私はきつと主婦の仕事は性に合っているのだと思います。春になるまでもうしばらくのんびりさせていただいて、来年はまたがんばります。行事の際に私が休んだりしても

なんの不都合もなく進めてくださったお手伝いのみなさまありがとうございました。

数日前の嵐で銀杏の実がすべて落ちました。宮沢賢治の短編に『いちようの実』という本当に短い小説があります。今日こそは銀杏の実の旅立ち、母である銀杏の木と別れが迫っている子どもたちの会話が綴られています。とてもあたりの会話が綴られて胸をうつ優しさにあふまえてそれなのに胸をうつ優しさにあふれている会話なのです。『北から氷のよう冷たい透きとおった風がゴーツと吹いて来ました。』「さよなら、おっかさん。」「さよなら、おっかさん。」子供らはみんな一度に雨のように枝から飛び下りました。』まさにそのとおりの光景でした。

遠方に住む友人の母の計報にお題目を書いて送ったという賢二、法華経の熱心な信者だったと聞きます。その優しさあふれる文章を思い出しながら銀杏を拾っています。毎日を丁寧に、優しい気持ちで淡々と暮らしてゆく。賢二の世界のようになんか思っています。

本堂前の銀杏の実を除夜の日に皆さんにさし上げます。どうぞ暖かくしてお出掛け下さい。

行事案内



・お札配り

暮れのお経にお仏壇のある県内の全檀徒宅をお伺いしています。その際に来年の新しいお札をお届けし、法事のある精霊をお知らせしています。

・大晦日・除夜の鐘

十一ページでご案内のように、除夜の鐘を皆さんで撞いていただきます。昨年から玄関受付で整理券を配っています。まず玄関受付にお越しください。人数分の整理券をお渡しします。駐車場が込み合いますので照明もありますが十分気を付けて下さい。

・元旦年始参り

元旦と二日の午前九時から午後四時まで受付しています。大広間で住職がお待ちしていますので、遠慮なくどなたでもお入りください。新しい年の始まりを本堂へのお参りから始めましょう。

・年回忌のお知らせ

妙光寺が葬儀をお受けした方で、来年に法事の当たるお宅に直接お知らせさせていただきます。法事は土日に集中しますので日取りのご相談はお早めにごうぞ。

・星祭祈願

一年間の家内安全と健康、幸福を祈願する「星祭」は一軒二千円です。元旦朝の法要で祈願の上、家族全員の星を記入したお札を差し上げています。新規希望者のみ家族全員の氏名、性別、生年を書いてお申し込みください。遠隔地の方のお札は郵送します。

・位牌堂の安置と命日のご回向

本堂隣の位牌堂に申込み者のお宅の位牌を安置し、毎朝の法要で月命日に当たる精霊のご回向をしています。費用は年間一万二千円。継続の方は平成二十一年度分を二月までにお納めください。この三十年間分(三十万円)から永代供養としています。

あ
と
が
き



冬の訪れが今年は早いようで、十一月は雷と冷たい雨の日が続きました。この季節は来客も電話も少なくなつて、春まではお寺が静かになります。私らは正月明けまでは忙しいのですが、それから二月末まで冬籠りです。この間に新年度の計画や資料準備と休みはないのですが、集中してできるありがたい時期です。

アメリカ発の経済不況は、基金の一部が消失という妙光寺にも大きな影響がありました。百年に一度という大不況といわれますが、この先一体どうなるのか誰にも予測が付きません。世間に吹く風がさらに冷たく感じられることになりそうです。寺の予算も引き締めつつ、さらに暖かく心休まる妙光寺を引き続き目指して参ります。どうぞ慌しい年の瀬を気をつけてお過ごしいただき、良いお年をお迎えください。

(小川)